

『資本論』 第1部 資本の生産過程

<要約:紅林進>

第3篇 絶対的剰余価値の生産 第5章 労働過程と価値増殖過程

第1節 労働過程

労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、労働力の売り手に労働をさせることによって、労働力を消費する。

労働過程はまず第一にどんな社会的形態にもかかわりなく考察されなければならない。

労働はまず第一に自然と人間の間の一過程である。この過程で人間は自分と自然との物質代謝を自分自身の行為によって媒介し、規制し、制御するのである。人間は、自然素材に対して彼自身一つの自然力として相対する。彼は、自然素材を、彼自身の生活のために使用されうる形態で獲得するために、彼の肉体に備わる自然力、腕や脚、頭や手を動かす。人間は、この運動によって自分の外の自然に働きかけてそれを変化させ、そうすることによって同時に自分自身の自然（天性）を変化させる。彼は、彼自身の自然のうちに眠っている潜勢力を発現させ、その諸力の営みを彼自身の統御に従わせる。

最悪の建築師でさえ最良の蜜蜂にまざっているというのは、建築師は蜜房を蠟で築く前にすでに頭のなかで築いているからである。労働過程の終わりには、その始めにすでに労働者の心像の中に存在していた、つまり観念的にはすでに存在していた結果が出てくるのである。

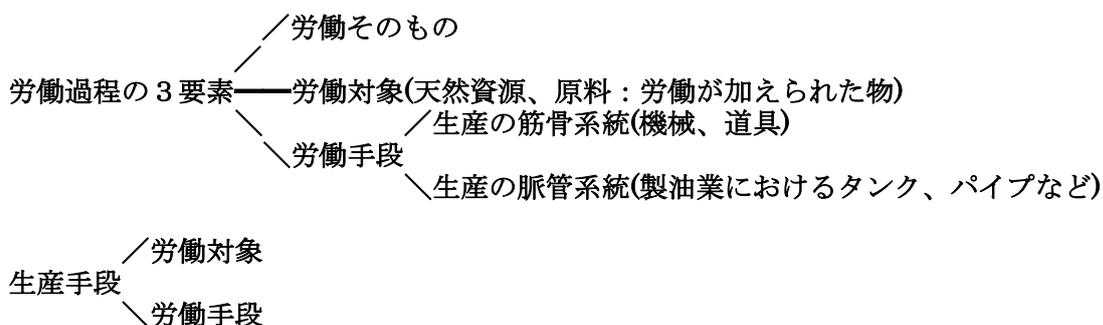
労働する諸器官の緊張のほかに、注意力として現れる合目的な意志が労働の継続期間全体にわたって必要である。しかも、それは、労働がそれ自身の内容とその実行の仕方によって労働者を魅することが少なければ少ないほど、したがって労働者が労働を彼自身の肉体的および精神的諸力の自由な営みとして享受することが少なければ少ないほど、ますます必要になるのである。

労働過程の単純な諸契機は、合目的な活動または労働そのものとその対象とその手段である。

人間のために最初から食料や完成生活手段を用意している土地（経済的には水もそれに含まれる）は、人間の手を加えることなしに、人間労働の一般的な対象として存在する。

これに反して、労働対象がそれ自体すでにいわば過去の労働によって濾過されているならば、我々はそれを原料と呼ぶ。

労働手段とは、労働者によって彼と労働対象の間に入れられてこの対象への彼の働きかけの導体として彼のために役立つ物またはいろいろな物の複合体である。



労働過程は、資本家による労働力の消費過程として行われるものとしては、2つの特有な現象を示している。

- ① 労働者は資本家の監督のもとに労働し、彼の労働はこの資本家に属している。
- ② 生産物は資本家の所有物であって、直接生産者である労働者のものではない。

第2節 価値増殖過程

資本家はただ使用価値を生産しようとするだけではなく、商品を生産し、ただ使用価値だけではなく**剰余価値**をも生産しようとする。

商品そのものが使用価値と価値との統一であるように、**商品の生産過程も労働過程と剰余価値形成過程との統一**でなければならない。

どの商品の価値も、その使用価値に物質化されている労働の量によって、**その生産に社会的に必要な労働時間**によって、規定されている。

労働過程では、労働は絶えず不静止の形態から存在の形態に、運動の形態から対象性の形態に転換される。

労働過程が続いている間に、ただ社会的に必要な労働時間が費やされるということは、決定的に重要である。ただ社会的に必要な労働時間だけが価値形成的として数えられるからである。

<糸の生産における例示>

10ポンドの綿花を原料として、労働者をその労働力を再生産するのに必要な価値相当分（必要労働時間）の6時間働かせて、10ポンドの綿糸を生産し、その綿糸は15シリングで販売できるとする。

資本家は原料の綿花の購入と労働手段としての紡錘の消耗分に12シリングを、労働者の労賃に3シリングを払ったとする。そうすると前貸し（投下）された金額は12シリング+3シリング=15シリングで、販売価格と差がなくなり、儲け、剰余価値を得られない。

しかし労働者をその労働力を再生産するのに必要な価値相当分の6時間を越えて、たとえば12時間働かせるとすると、原料の綿花と労働手段の紡錘の消耗分は倍の合計24シリング必要になるが、前貸し（投下）された金額は24シリング+3シリング=27シリングで、30シリングで販売できる綿糸20ポンドが得られることになり、30シリング-27シリング=3シリングの剰余価値を得られることになる。このように資本家は、労働者に、その再生産に必要な必要労働時間を越えて労働させることによって剰余価値を得る。

労働力の（交換）価値と労働力の使用価値は異なる。

労働力の価値と、労働過程での労働力の価値増殖とは、二つの違う量である。

労働力の独自の使用価値：価値（創造）の源泉であり、しかも**それ自身が持っているよりも大きな価値（創造）の源泉**だという独特な使用価値。

価値形成過程と価値増殖過程とを比べてみれば、価値増殖過程は、ある一定の点を越えて延長された価値形成過程にほかならない。もし価値形成過程が、資本によって支払われた労働力の価値が新たな等価物によって補填される点までしか継続されなければ、それは単純な価値形成過程である。もし価値形成過程がこの点を越えて継続すれば、それは価値増殖過程になる。

第6章 不変資本と可変資本

労働過程のいろいろな要因は、それぞれ違った仕方で生産物価値の形成に参加する。

労働者は、彼の労働の特定の内容や目的や技術的性格を別とすれば、一定量の労働を付け加えることによって**労働対象に新たな価値を付け加える**。

生産手段の価値は、**生産物に移転されることによって、保存される**。この移転は、労働によって媒介される。

労働の二面性：一方の属性では**価値を創造**し、他方の属性では**価値を保存または移転**する。

生産手段が、土地や風や水や鉱脈内の鉄や原始林の樹木などのように、人間労働の生産物でないならば、それは決して生産物に価値を移転しない。その生産手段は、交換価値の形成者として役立つことなしに、使用価値の形成者として役立つ。

生産手段は、それが役立てられる労働過程にかかわりなく持っている価値よりも多くの価値を生産物に付け加えることは決してできない。

労働がその合目的な形態によって生産手段の価値を生産物に移して保存する間に、その運動の各瞬間は追加価値を、新価値を、形成する。

労働過程は、**労働力の価値の単なる等価が再生産されて労働対象に付け加えられる点を越えて、なお続行される**。だから、労働力の活動によってはただそれ自身の価値が再生産されるだけではなく、ある超過価値が生産される。この剰余価値は、生産物価値の内の、消費された生産物形成者すなわち生産手段と労働力との価値を超える超過分をなしている。

不変資本：生産手段すなわち原料や補助材料や労働手段に転換される資本部分は、生産過程でその価値量を変えないのである。それゆえ、私はこれを不変資本部分、またはもっと簡単に、不変資本と呼ぶことにする。

可変資本：労働力に転換された資本部分は、生産過程でその価値を変える。それはそれ自身の等価と、これを超える超過分、すなわち剰余価値を再生産し、この剰余価値はまたそれ自身変動しうるものであって、より大きいこともより小さいこともありうる。資本のこの部分は、ひとつの不変量から絶えずひとつの可変量に転化して行く。それゆえ、私はこれを可変資本部分、またはもっと簡単には、可変資本と呼ぶことにする。

労働過程の立場からは客体的な要因と主体的な要因として、生産手段と労働力として、区別されるその同じ資本部分が、価値増殖過程の立場からは不変資本と可変資本として区別されるのである。

不変資本の概念は、その諸成分の価値革命を決して排除するものではない。
(新たな発明などによる生産手段の価値の変動などによって)

第7章 剰余価値率

第1節 労働力の搾取度

$C(\text{前貸資本}) = c(\text{不変資本}) + v(\text{可変資本})$

$C'(\text{生産された商品}) = c(\text{不変資本}) + v(\text{可変資本}) + m(\text{剰余価値})$

$v(\text{可変資本}) + m(\text{剰余価値}) = v(\text{可変資本}) + \Delta v(\text{vの増加分})$

$\frac{m}{v}$ = 剰余価値率 (労働力の搾取度)

c(不変資本): 投下された生産手段の価値、その価値は移転するのみ

※労働手段(機械等)はその価値の消耗分を生産物に移すだけ

v(可変資本): 投下された労働力の価値、その大きさはその労働力の再生産に必要な生活手段の価値で計られる。

v(可変資本)+m(剰余価値): vの新たに作り出した価値

m(剰余価値): 増殖した価値、vがvの価値を超えて増殖させた価値

／ (これまで) 「一商品の生産に必要な労働時間」

注: 「必要労働時間」

＼ (これから) 「労働力という独自の商品の生産に必要な労働時間」

必要労働時間: 一労働日の内、投入された労働力の再生産に必要な労働時間

剰余労働時間: 一労働日の内、必要労働時間を超えて労働する時間、搾取される労働時間

剰余価値率 $\frac{m}{v} = \frac{\text{剰余労働}}{\text{必要労働}} = \text{労働力の搾取度、労働者の搾取度}$

※因みに利潤率は $\frac{m}{c+v}$

第2節 生産物の比例配分的諸部分での生産物価値の表示

糸価値30シリング = 24シリング(c) + 3シリング(v) + 3シリング(m)

糸の価値は、糸の生産中に生み出された新価値と、すでに糸の生産手段の内に前から存在していた価値との合計に等しい。今ここで示されたのは、生産物価値の内の機能的または概念的に違った諸成分は生産物そのものの比例配分的諸部分で表わされうる、ということである。

第3節 シーニアの「最後の1時間」

労働時間を制限する「工場法」に反対するマンチェスターの工場主たちに懸賞闘士として雇われた、イギリス・オクスフォードの経済学者ナッソー・W・シーニアは、労働時間の制限に反対するため、労働時間を1時間短縮すれば、工場主の純益はなくなるという「最後の1時間」なる奇妙な理論を考え出した。マルクスはその誤りを批判。

第4節 剰余生産物

剰余生産物： 生産物のうち剰余価値を表している部分をわれわれは剰余生産物と呼ぶ。

剰余生産物の高さは、総生産物の残余に対するその比率によってではなく、必要労働を表わしている生産物部分に対する剰余生産物の比率によって規定される。

剰余価値の生産が資本主義的生産の規定的目的であるように、生産物の絶対量ではなく剰余生産物の相対量によって富の高さは計られるのである。

必要労働と剰余労働との合計、すなわち労働者が自分の労働力の補填価値と剰余価値を生産する時間の合計は、彼の労働時間の絶対的な大きさ、一労働日をなしている。